
 学 会 記 事

第174回新潟循環器談話会

日 時 昭和63年3月5日(土)午後
午後3時～6時
会 場 新潟大学医学部有任記念館

テ ー マ 演 題

各科領域からみた先天性心疾患

1) NICU における先天性心疾患例の臨床統計

吉沢 浩志・石田 道雄 (新潟大学)
竹田 浩・大桃 幸夫 (分娩部 NICU)
竹内 正七

先天性心疾患 (CHD) 児出生の頻度は出生1000に対して約6～8名とされ、他の先天異常に比べても多く、また新生児期に発生する例は重症例が多くを占め予後も極めて不良である。

昭和56年4月のNICU開設以来、昭和62年までに経験したCHD例は67例で、他に超・極小未熟児例に合併したPDA例が26例あった。

この間の総入院児数は1,179名であるので、CHD児の占める頻度は5.7%であった。

疾患別にはVSDが14例と最も多く、ASD 4例、T/F 4例、無脾症4例、TGA 4例、PS or PA 5例、TAPVR 3例、HLHS 3例などがあった。他にAV block 2例、一過性不整脈4例などが経験された。また染色体異常例が9例、他の先天異常を合併した複雑奇形例が16例あった。

67例中死亡の転帰をとったのは42例62.7%であり、NICUにおけるCHD児の治療は関連各科の綿密な連携プレーを行い、予後の改善に努めなければならない最大関心事である。

2) 先天性心疾患合併妊婦の臨床統計

吉沢 浩志・石田 道雄 (新潟大学産科)
吉谷 徳夫・竹内 正七

過去17年間に当科で経験した心疾患合併妊婦は278例で、この間の総分娩数11,161例の2.49%の頻度であった。

278例の心疾患のうち143例51.4%が先天性心疾患例であり、心疾患合併妊婦に占める先天性心疾患の頻度が高くなってきている。

先天性心疾患の疾患別頻度はVSDが47例と最も多

く、次いでASD 41例、T/F 20例、PDA 12例、PS 9例、Ebstein 奇形5例、その他9例で、VSD、ASD例が61.5%であった。

NYHAの重症度分類ではI度が圧倒的に多く、過去7年間70例中I度60例85.7%、II度9例12%、III度1例1.4%でIV度例は無かった。

また、妊娠・分娩中の心不全発症例は無く、分娩様式では母体負担軽減の適応で施行される吸引・鉗子分娩が高率である他、特に重篤な異常は無かった。新生児については子宮内胎児発育遅延例がやや多い傾向にあるが有意なものではなく、幸いに先天異常例はPS合併例からの原因不明胎児水腫、VSD例1例であった。

3) 失神を併った高齢者 ECD の 1 例

岸本 秀文・鈴木 善幸 (県立中央病院)
大滝 英二・高野 諭 (循環器内科)
布施 克也 (県立妙高病院)
(内科)

66才にて生存するECDの例について報告する。症例は66才女性。体動時の動悸と息切れ、失神を主訴として入院。理学的にはASDを思わせる聴診所見を呈し、血液ガスは低酸素血症を示した。胸部X線は肺血管陰影の増強を示し、心電図上 -16° の左軸偏位、完全右脚ブロックを呈した。心エコーでは心房中隔の一次孔欠損と僧帽弁前尖のクレフトを認めた。心臓カテーテル検査では、RAでの酸素飽和度のStep up、Qp/QS 5.31 L/R shunt 45.4%が認められた。ジギタリス、ベラパミルで自覚症状は軽快している。失神の原因は明らかにならなかったが、過去の報告についてまとめ、若干の考察を加えた。

4) 手術適応が問題となった成人 ASD 症例の検討

結城 伸泰・五十嵐 裕
小池 隆司・松原 琢 (新潟大学第一内科)
山添 優・和泉 徹

成人ASDでは左室コンプライアンスの低下と肺高血圧が2大問題点である。今回我々は前者が問題となった3症例と後者が問題となった1症例とを報告し、バルーン閉塞試験の意義について考察を加えた。前者の内訳は肥大型心筋症の合併が疑われた例、陳旧性心筋梗塞合併例、著明な高血圧を伴った例であり、いずれも閉塞試験でLVEDPが30mmHg以上に上昇した。第3例のみニフェジピン負荷後LVEDPは18mmHgへ低下した

ので、閉鎖術施行し、十分な降圧療法下で経過良好である。後者は肺血管抵抗が 13.9 単位・ m^2 と高度の肺高血圧を示し、両方向シャントであったが、手術は行われなかった。肺血管抵抗の可逆性の判断が問題となった。

5) 心奇形を合併した新生児外科症例の検討

大沢 義弘・岩淵 真 (新潟大学付属病院
小児外科)

心奇形を合併する小児外科疾患の中で治療上問題となるのは食動閉鎖症や横隔膜ヘルニア等を主とする新生児外科疾患であり、その治療成績は不良である。そこで、これら新生児外科疾患につき検討し報告する。

昭和41年より61年までに経験した新生児外科症例は526例(死亡例97, 18%)で、心奇形を合併したものは38例(7%)であり、そのうち死亡は21例(55%)であった。

食道閉鎖症、横隔膜ヘルニアは各々44例、30例(死亡15例:34%, 13例:43%)で心奇形は18例、8例に合併し、そのうち11例(61%), 8例(100%)が死亡した。心臓手術は9例に行われ4例が死亡した。

6) 一地方病院小児心臓病診療からみた先天性疾患

竹内 衛・柳本 利夫 (国立療養所新潟病
塚野 真也・鈴木 幸雄 院 小児科)
東条 恵・小沢 寛二

昭和60年5月より同63年1月までの2年9箇月の間に当院小児心臓病科で診察した265例につき検討した。男134例、女131例で、年齢は新生児から44歳に及び、新生児から2歳、6歳、および12歳にピークが認められた。

疾患別では、先天性が89例(33.6%)、後天性が112例(42.3%)、その他が64例(24.1%)であった。先天性では心室中隔欠損が44例とその約半数を占め、この他では心房中隔欠損11例、肺動脈狭窄11例、フォロー四徴9例、動脈管開存8例などが頻度の高い疾患であった。これらの内、心臓カテーテル検査を、及び手術を要するものは、新潟大学医学部、および立川総合病院に紹介し、心臓カテーテル検査を受けたもの20例、手術を受けたもの10例であった。なお遠隔死亡は2例であった。また、新生児期に23例の受診があり、これは当科のミニ NICU(責任者 柳本)の影響が大であると考えられた。この他、アイゼンメンジャー症候群が3例にみられ、今後とも無視できない問題点であると考えられた。

後天性では川崎病が69例、不整脈が34例と多く、これに対して弁膜症は3例と少なかった。6歳と12歳とに年齢分布のピークをみているのは学童心臓検診のためと考

えられた。

地域的な先天性心疾患診療の向上のためには、専門医の充足も必要だが、それが可能となるまでは新生児科医や学童心臓検診への協力、病院間の連携等のシステムをより一層進めなければならない。小児循環器医の一層のサービスが必要である。

7) 心室中隔欠損症兼大動脈弁閉鎖不全症の手術と遠隔成績

今泉 恵次・金沢 宏 (新潟大学第二外科)
宮村 治男・江口 昭治

手術後10年以上経過した心室中隔欠損症兼大動脈弁閉鎖不全症37例について、大動脈弁の術式により症例を人工弁置換-AVR群、大動脈弁形成術-AVP群、無処理群に分け、その予後と現在の心機能を検討した。

結果 AVR群11症例、大部分初期の症例で使用弁種はS-E弁10例、B-S弁1例、4例手術死、3例脳塞栓死、2例事故死。生存2例(術後18年、19年経過)は塞栓の既往なくNYHA 1度である。

AVP群は19症例、3歳時AR III度例が4年後突然死した。再手術は3例、1例AR増強で1年後、2例がIEで13、14年後AVRとなった。残る15例は1例を除きARは改善し、生活制限はない。

無処理群7症例、術後11-21年を経てAR消失4例、I度1例、他2例は心雑音なく、最低血圧も正常域で、通常の日常生活を営んでいる。

結語 AVR群は初期の開心術補助手段の未熟さ、抗凝固療法の不徹底さなどにより成績不良であった。AVP、無処理群は、ほぼ満足な結果であったがIE発症には注意すべきである。

8) 高齢者における先天性心疾患症例の検討

片桐 幹夫・鈴木 万里 (立川総合病院心臓
山本 和男・中沢 聡 (血圧センター胸部
春谷 重孝・坂下 勲 外科)

当院における高齢者先天性心疾患手術症例を検討したので報告する。昭和44年から62年までの19年間の開心術症例総数は1293例で、先天性心疾患は633例(49.0%)であった。

30才以上症例は132例(20.9%)で、ASD 98例、VSD 12例、ECD 9例、PS 3例、その他10例で、平均年齢は44才、手術死亡は0であった。

最近6年間で高齢者手術症例が増加したが、これは主としてASD症例の増加に起因すると思われた。ASD